
なつめ

ナガス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

なつめ

【Nコード】

N 6 4 3 3 J

【作者名】

ナガス

【あらすじ】

正確に測量されてしまった残りの人生、二年三ヶ月。

その短い余生と引き換えに、一週間だけ神様になれるとしたら。

貴方は、どのような選択を選びますか？

前編

正確に測量されてしまった残りの人生。

あと二年三ヶ月と、一日。

毎朝毎朝、カレンダーを見る度に焦らされる。私にはもう、時間が無い。

刻一刻と迫ってくる決断の時。カチコチという時計の音が、やけに重く耳に届く。

朝食に味が無い。もはや私は正気じゃいられない。

どうしよう。どうしよう。

カップを握る手も、震えている。熱いはずのコーヒーに、温度を感じていない。

そんな焦る私を置いていくかのように、今日も一日が始まった。

私にとって、決断の日。

あと二年三ヶ月と一日しか残されていない人生と引き換えに、一週間だけ神様になれるとしたら。

どんな選択を、しよう。

妹である真美の「いつてきます」という元気な声が玄関口から聞こえてきた。その声を聴いて台所に立っている母も「いつてらっしゃい。気をつけるのよ」と、いつも通りの返事をする。

もうしばらくすると母は私に向かって「いつまで食べてるの。早くなつめも行きなさい」と、少し不機嫌そうな声で言い出すのだから。

これがいつもの朝。日常。

だけど私には、まるで遠い世界の事のように感じる。

この日常も、あと二年と三ヶ月経てば、終わりが来てしまうのだから、無理も無いのかも知れない。

「いつまで食べてるの。早くなつめも行きなさい」

母の声が、遠くから聞こえてきた。

いつもならここで「はい」とやる気無く返事をし、食べていた食パンを一気にクチへとほおぼり、コーヒで胃へと流し込んで、足早に玄関へと向かっている所。

だけど今日は、母がどんな顔をして私に声をかけているのか、気になった。

母親とは仲が良くないため、普段は絶対に視線を合わせたりはしないが、今日は特別な日。

私はゆつくりと母親が立っている台所へと首を向け、視線を母に移す。

そして目にした光景は、台所で洗いものをしている、母の後姿。

私は、母がこちらを見てさえ居なかった事に、今日はじめて気が付いた。

「え」

何故だろう。今までは私のほうが母を無視してきたつもりだったのに。

無視されていたのは、私のほうだった。なんて、思ってしまったている。

「え？」

「何よ、聞こえなかったの？」

母は、不機嫌な声を出す。しかしその体勢は変わらない。

私に斜めの後ろ姿を見せながら、今でも手を動かしている。

「早く食べちゃってよ。洗いものが終わらないんだから」

この女は、何を言っているのだろう。

私はあと、二年と三ヶ月で死んでしまうのだ。

それはもう、決められてしまっている事。

そんな私に対して、洗いものが、終わらない？

確かに私は、私の余生の事を母に話していない。どうせ信じないだろうし、どうせ怒るだろう。

しかしここ数日の私は、明らかに様子が変だったはずだ。

あんなに活発だったのに。あんなに元気だったのに。あんなに勉強をしていたのに。あんなに真面目だったのに。

今は、まるで人が変わったかのように、覇気が無いはずだ。それなのにこの女は。

ちつとも、ちつとも、気付いてくれない。そして見てさえも、くれない。

「え……？」

私の三度目の「え」を聞いた時、ようやく母はこちらを向いた。眉間にシワを寄せ、まるで私を恨んでいるかのように、睨む。

「何度も言わすんじゃないわよ！ 早く学校行きなさい！」

大きな大きな、声に聞こえた。

今まで遠くから聞こえていたように感じていたが、私の聴力は突然、普段のものに戻ったらしい。

鼓膜が、痛い。

そして、急に現実感の戻った私の胸に、湧き上がる黒いもやもや。このもやもやは、私のクチから外に出ようと、私の体の中をどんどんと駆け上ってくる。

いや、全身に駆け巡る。

腕先に達し、腕を震わせる。足先に達し、足を震わせる。脳に達し、思考を奪う。

そして、クチ。歯がガチガチと音を鳴らす。唇がブルブルと震える。今にも、黒いもやもやが飛び出しそうだ。

「何よその目は！ そんな目したって怖くないんだからね！ 早く行きなさい！」

「……はい。いつてきます」

私は、入らない力を必死に絞り出し、椅子からゆっくりと腰をあげた。

全身がブルブルと震えている。耐えられそうも無い。ああ、耐えられそうもない。

私は少し大きめな石を拾い、思い切り壁へとぶちあてた。

その石はガツツという音を立てて跳ね返り、再び地面の石と混ざり合う。

そしてまた違う石を拾い、ぶつける。

ガツツと音を立てて跳ね返る。

次に私は、大声を上げた。

どんな言葉を発したのかは、解らない。ただ大きな声を上げた。

「あああああああ！ があああああつ！ あつ！ あああつ！」

そして手足をブンブンと振り回す。何も無い空を、ただただ延々と殴る。蹴る。

「あつ！ ああつ！ どおだあ！ どうだあ！」

誰に話しかけている訳でも無いが、私は誰かに尋ねていた。

しかも、何が「どうだ」なのか解らない。まさかこの、愚にも付かないパンチャキックに対して「どうだ」と訊いているのだろうか。

「はっ……！ はっ！ はあっ！」

私は視界をぼかして、膝に手をつき肩で息をした。

そして少し落ち着いてから、誰も見ていなかった事を確認するために、ぐるりと辺りを見渡す。

私が今居る場所は、通学路では無い。家を出るなり、学校とは逆方向へと私は歩いていった。

そしてたどり着いた場所は、誰も来ないであろう草木が生い茂る山の中。近くに民家らしい民家も無く、あるのは石をぶつけた一軒の空き家のみ。

「はあ……はあ……ふうっ」

私は深く深呼吸をし、息を整える。

二度、三度と繰り返し、ようやく私は落ち着いてきた。

何故、私が今ここに居るのかと言うと、今日ここで待ち合わせをしているからだ。

もっとマシな場所が無かったのだろうか。虫は多いし昼だと言うのに薄暗い。唯一視界に入る人工物のボロ屋敷すらも、不気味に映る。

「……遅い」

あまりの寂しさに呟いてみた。

「ごつめん。寝坊しちゃいました」

独り言に、あるはずの無い返答が私の耳元から聞こえてきた。

一瞬、何が起こったのかわからなかったが、どうやら体は反応していたようだ。

私の口が自然と「ひっ！」と悲鳴を上げた時には、既に膝が地面へと着いていた。

「えー、そんなにビックリしなくても。ビックリしたなつめちゃんに私がビックリしちゃいます」

「あつ……貴方……いつの間に……」

私はゆっくりと首を声のするほうへと向ける。

まるで映画のスローモーションになる場面を見ているかのように、私の視界はゆっくりとその場に立つ人物を捕らえていった。

「そんな質問に意味なんて無い事くらいわかるでしょ？ それよりさ、覚悟は決まりました？」

私の視線はまず、彼女の下半身を捕らえた。

濃い茶色のローファーを履いており、そこから細い足が伸びているのが見える。

紺色の靴下を膝下まで履いているようだ。

「覚悟……」

「そう、覚悟。なつめちゃんなら良い返事をくれると思うんだけど次に私の目が映し出したのは、彼女の着ている服だった。

緑色のチェック柄が特徴的なスカートを履いており、白いブラウスの上に紺色のカーディガンを羽織っていた。

彼女は、私と同じ制服を着用している。この辺りの中学生なら誰もが羨む、制服だ。

しかしそれは、デザインが可愛いという意味では無い。この地域では、入学するのが最も難解だと言われている高校の制服だからだ。

「……私は」

「うんうん、私は？」

私は視線を上げる。

そこには、とても整った顔立ちの、青い瞳を持つ少女の顔があった。

髪の色は金髪で、大きな赤色のリボンで結われたポニーテールが、腰の下まで伸びている。

「……本当に、死ぬの？」

私がそう言うと同時に、彼女は満面の笑顔から覇気の無い表情へと、あからさまに変えた。私に対して、明らかに落胆している。

それも、当然の事なのかも知れない。この質問をするのは、これで何回目なのか、自分でも解らない。

「……何度も説明するの面倒です」

「だよな……ごめん……でも」

「でも、出来る事なら嘘であって欲しい。信じたくない。生きていたい。ですか？」

「……」

数ヶ月前、彼女に初めて話しかけられて以来、彼女は私に付きまといてきた。

最初はいけ好かない女だと思っていたのだが、話してみると面白い子で、一緒に居ると明るい気分になれていた。

しかし彼女は、ある日突然、何の前触れも無く「なつめちゃん、死期が近いよ」と言い出した。

最初こそ冗談だと思っていたが、彼女は「二人だけの秘密」と銘打って、色々なものを見せてくるようになった。

私が彼女に見せられたものは、衝撃的なものばかり。

まず最初に見せられたものは、自殺。

「私は死なないんですよ」と言った彼女は、私の目の前で、学校の屋上から飛び降りてみせた。

バチンという大きな音を立てて、校庭へと叩きつけられた彼女を、私は目撃した。

しかし彼女は、何事も無かったかのように立ち上がり、私に向かって「おい」と大きな声で呼びかけ、手を振っていた。

彼女の顔は、血だらけで、振っていた手も、おかしい方向へと曲がっていた。

他にも。自らの首にナイフを突き立てたりもした。

大量の血が、彼女の口と傷口からあふれ出し、充血させた目をギョロギョロと泳がせていた。

次に、ベルトで首吊りをした。

パンパンに膨れ上がった彼女の顔は、人間のモノとは思えなかった。

他にも、他にも、他にも。

彼女は様々な方法で、自らを殺し続けていた。

しかし、そのいずれでも彼女は死に至る事は無く、いつだって「
どお？　どんな気持ち？」と言いながら、笑顔を浮かべていた。

次に見せられたものが、夢。

彼女は私に、夢を見せた。

その夢というのは、誰かが死んでしまうという、夢。

あくまで、夢だ。夢のハズなのだ。

しかし驚く事に、夢の中で誰かが死んだ時刻ピッタリに、現実世界でもその人は死んでいた。

時には自殺だったり。時には交通事故だったり。時には暴漢に襲われていたり。

病気だったり。急性のものだったり。

残酷だったり。美しかったり。

色々な人の色々な死に方を、何度も何度も、毎晩毎晩、見せられ続けた。

「私には人の死期が解るんです。だからなつめちゃんに見せる事が出来るんですよ」

彼女は笑顔でそう言っていた。

どうやら彼女は、人間では無いらしい。

いや、人間と同じ構造をしているが、この世界の住人では無く、違う世界と繋がっているそうだ。

それを天国と呼ぶのか、地獄と呼ぶのか、宇宙と呼ぶのかは、私は知らない。

だけど確かな事が、ひとつ。

これまでの彼女の言葉に、ひとつだつて嘘は無かったという事。こうなつてくると、もはや疑いようが無かった。

私は、あと二年三ヶ月で、死ぬ。

それもきつと、疑いようの無い事実なんだろう。

その現実が、私には重過ぎる。

「嘘であつて欲しい……信じたくない……死にたく無いよお……」
「ふうん」

私は地面に膝をつきながら手元に生えていた草を握り締めた。
プルプルと自分の手が震えているのがわかる。

「ねえ、死なないで済む方法は無いの？ 貴方なら、魔女の貴方なら、寿命を延ばす方法くらい」

「残念ですけど、それは無理ですよ。詳しく説明しても解らないだろうから説明しませんけど、簡単に言つと運命ですから」

彼女の渴いた声が、私の胸に突き刺さる。
痛い。

「じゃあ、なんで死期を早める事は出来るのよ……おかしいじゃない、そんなの……」

「んもおゝ……説明してもわっかんないって言ってるじゃないですかっ」

彼女は少し怒った表情を作り、腰に両手を当てて仁王立ちの状態になった。

「私は別にどっちでもいいんです。このまま短い余生を送るもよし。少しでも有意義に生きようと契約するもよし。なんですよ」

その言葉を聴いて、私はふつつと、怒りの感情がこみ上げてきていた。

握っていた雑草を、いつの間にか引き抜いている。

「なんでっ……」

「ん？」

「じゃあなんで私に寿命の話なんかっ……」

「べつつにいゝ。言うなら暇つぶしてやつですかね」

中編

神に匹敵する力を手に入れるには、契約が必要。
しかしそれは、魔女である彼女との契約では無く、悪魔との契約だった。

悪魔と人間とが契約する際、必要となるもの。
それは純潔か、血か、寿命、つまり魂らしい。
純潔や血では効力が弱く、せいぜい少し幸せになる程度のもの。
しかし寿命となれば、話は別。

魔女にも、悪魔にも出来ない事が出来るようになるらしい。

「契約は、完了だ」

悪魔が、言った。

そして瞬間的に、その姿を消す。

まるで、風景の一部となってしまうたかのよう。

「危なかったですね、なつめちゃん。私が居なかったら、寿命ばかりか処女も奪われてましたよ。それも無意味に」

悪魔が呼び出された瞬間、私は声すら出せなかった。

目の前の光景から目を放す事が出来ず、身動きもとれず、ただ小刻みに震え、小便とよだれを垂れ流して、立ち尽くしているだけ。

体が言う事をきいてくれず、指の一本だって、今は私の意志の外にあるかのよう。

「着替えは……ある訳無いですよね。どうします？ 私とつてきましようか？」

彼女の明るく少し高い声が、まるで無機質なもののように私の耳に届く。

登校中に聞こえてくる車の音や、何の気なしにつけていたテレビから流れてくる音。それらとまるで同じように感じる。

「あつれ？ なつめちゃん」

私はおそらく、名前を呼ばれている。

そればかりか視界には、不思議なものを見るかのような表情をした彼女の顔が映っていた。

当然、この場には私以外の人間は存在しない。つまり彼女は独り言を喋っているのでは無く、私に話しかけている。

その事に気付けるまで、しばらくかかった。

「あ……貴方……何者……」

震える唇がようやく発した言葉は、特に意味を成さない質問だった。

「なつつめちゃんっ。正気、取り戻しました？」

私の制服は、ビリビリに裂かれていた事に、今さら気づく。

正常な思考を取り戻すまでに、私は三十分近くかかっていたようだ。

その間に彼女は、気を利かせて自分の私服を持ってきてくれた。

「なつつめちゃん、叫び声も上げないんだもん。なあんか人間らしくありませんね」

「言葉なんか、出る訳無い……」

私は民家の中で、引き裂かれた制服を抱きしめながら、寒くも無いのに震えていた。

震えているというのに、ジトツとした汗が、まるで全身を包み込んでるように感じ、汗に体の自由を奪われてしまったかのように感じる。

これがどうやら、本物の恐怖らしい。

今まで彼女に見せられた自殺も。殺人も。事故死も。私に本物の恐怖を与える所までは、届かなかったという事だろうか。

やはりどこか、他人事だったのだろう。

いや、そればかりか、自分以外の死に対して、なんとも思わなくなっって行ったように感じる。

「んー、そういうもんかな。どうでもいいけど」

「どうでもいいって……良くないよ」

「まあまあなつめちゃん。これで契約完了ですよ。早く着替えてください」

彼女は私に向かって二カツと笑ってみせた。

その表情は、幼い子供が欲しかった玩具を手に入れた時のような、満面の笑み。

「さあて。何しましょうか？」

特にこれと言って、自身が変わったような気はしない。

体の内側からあふれる、未知のチカラのような感覚を想像していたからだろうか、少しガツカリしている自分が居る。

「本当に、今の私は何でも出来るの？」

「んーと、そうですね。自分の視界に入るものは、何でも出来ます」と私と彼女は山を降りて、この町に唯一ある繁華街へと脚を運んだ。何をするにも、あの山の中では不便である。

「例えばこのコンクリートの壁。これに穴を開けるなんて事も……」

「あははっ」

笑われた。

しかし笑いたくなる気持ちは、解らなくも無い。

だって、そんな事に、意味は無いから。

「そんな事がしたくて寿命を」

「例えばって言ったでしょ」

それでも、何かで証明してみたい。

そういった好奇心が、私を突き動かす。

私はそつと、壁へと手を添えた。

「穴、あける」

「ちよつとちよつと、なつめちゃん」

「あけるよ」

「待って」

彼女は少しだけあわてた様子で、私の右腕をつかんだ。

それと同時に、私達が立っている場所から少し離れた所にある自動販売機が、ゴシャという音を立てて、折れ曲がった。

自動販売機が折れ曲がるというのは、なんとも不思議な表現かも知れない。

だけど実際、折れ曲がった。

「わっ！」

彼女は大声を上げて、驚いていた。

恐らくは住民達も、道行く数少ない人達も、皆驚いているのだろう。

だけど一番驚いたのは、私自身。

「なっ……んもおなつめちゃん！ 何してんの？」

私はこの瞬間だけで、一日分の汗を全て放出してしまったかのような。

サウナから出てすぐの状態のような。

自慰行為を数時間続けた後のような。

そんな感覚に、襲われた。

いや、それだけじゃない。

それらの感覚に、何かがプラスされているような……。

脱力している体とは裏腹に、胸の辺りが熱くなってくる、この感じ。

これはもしかして、優越感だろうか。

「ホント、なんだ……」

「え？ 何？」

「ホントなんだね」

「何？ チカラの話？」

「うん、チカラの話」

彼女は掴んでいた私の腕を、ようやく離れた。

そして少し呆れたような表情を作り「そーですよ」と、答える。

「私、まだ疑ってた」

試すなら、何か大きな事で試す。と、誓っていた。

車をひっくり返したり。

飛行機を落したり。

電車を脱輪させたり。

人力では無理な事をしたいと、思っていた。

出来ないなら出来ないで、彼女の話全て嘘で片付けられる。

出来るなら出来るで、実感が持てる。

そう思っていた。

「自販機なんか壊して、なんの得があるんですか？　こんな事してたら身動き取りにくくなりますよ」

「ホント、そうだね。そうだけど、ね、聞いて、聞いて」

「とりあえず離れましょうか。一週間しか無いのに、警察関係に時間とられるなんて勿体無いです」

「聞いてよ。私ね、今までずっとずっと空想してたんだ。神様になったら、この腐った世の中を作った人間を、許さないって」

「いいから。私の家行きましょう」

「優等生ぶっててさ、明るくてさ、頑張ってた私はさ、実はこんな事を考えてたんだよ」

「だけど実際、私に出来るのだろうか。」

「何故だろう。」

「何故なんだろう。」

「瞳の奥が、熱い。」

「じわあつと何かが溢れてくる。」

「瞬きすると、こぼれてしまいそう。」

「下を向くと、たれてしまいそう。」

「だから私は、彼女に腕を引っ張られながらも、瞳を開いたまま空を見つめ続けた。」

「彼女の家……というよりアパートは、とてもじゃないが人が住めるような環境では無い。」

木の板が丸出しの建物なんて、私は始めて見た。

どうやら彼女以外の住人は居ないようで、彼女の部屋のみが少し綺麗にされているようだ。

「何、この部屋」

「汚いけど、静かでいい所ですよ。取り壊しを決まらせないために居住権を主張して居座ってるんです。住んでいれば逆にお金が貰えるんですよ」

なにやら訳有りらしい事を、平然と口走っている。

「一人暮らし、なの？」

「ですよ。私親居ないし。生きるためにはどーにかしてお金稼がないと」

にかあつと笑顔を作って、彼女は笑ってみせた。

そして少しだけ床を掃除して座布団を敷き「ん」という声を出しながらそこに指を刺す。

私は少し躊躇しながらも彼女の指示通りに座布団へと腰を下ろした。

しかし、それからはずっと無言。

彼女は万年床であろう布団の上であぐらをかきながら、携帯電話をいじっている。

私は彼女の、その姿を眺めながら、ただただ正座の姿勢で座り続けていた。

彼女の名前は、ローラ。

私と同じ高校に通う、同級生。

明るい性格にこの美貌。授業は休みがちだが成績も優秀。特に外国語に関しては英語だけに留まらず、フランス語やドイツ語なんかも話せるらしい。

ローラの趣味は男向けのものが多く、クラスの男子達と音楽の話や漫画の話。果ては釣りの話なんかをしているのを、良く見かけていた。

だからと言って、女子から嫌われている訳でもない。ローラの周りには、いつだって人が集まっていた。

つまり誰とでも仲良くできる、本物の人気者。

正直、嫌でも目に付いていた。

私も成績は優秀で、周りの友達からは「ライバル」なんて呼ばれていた時期もある。

出席日数分、成績においては私のほうがリードしているが、いくら明るく振舞っても、私は男子にモテた事が無い。

容姿の差が、如実に表れてしまっている。

目の上のタンコブのように感じて……いた？ それとも、感じている……？

仲良くなってからと言うもの、そういった感情でローラを見つめた事が無かったので、解らなくなっていた。

「ん？ やあだ、なつめちゃん。そんなに熱い視線を送られても」

「え？」

「私はノーマルですよ」

ローラはニコツと笑って見せた。

その笑顔には、何の邪気もまぎれていない。

本当に本当に、心からの笑顔を送られたような気になってしまう。しかし、ローラに限ってそれは無い。

彼女は魔女であり、人の死に対しても笑顔で接せられるような女。私に対して抱いている感情も、心配では無く。ましてや気遣いでも無く。

根源にあるのは「楽しいから」というものだろう。

「別に、そんなつもりで見てたんじゃない」

「そうですか」

ローラは再び、携帯電話へと視線を移す。

それっきり、会話は無くなってしまった。

私は仕方なく、部屋に積み重ねられている雑誌を手に取り、何の気無しに読み始めた。

午後三時を過ぎたあたり、ようやくローラは重い腰をあげる。

どうやら携帯電話の充電が切れてしまったようだ。腰を上げる寸前にローラの「あ」という声と、ピーツという機械音が聞こえてきていた。

ローラはそそくさと携帯電話を充電器にセットし、おばさん臭く「ん〜」という声を上げ、腰をトントンと叩き、窓を開ける。

「まったくもって、なつめちゃんは詰まらない人ですね」

「え？」

ローラが発した言葉に、私はすつとんきような声を上げていた。

「なけなしの寿命を使って、チカラを手に入れたんだから。何か凄い事をやりに行くのが、普通だと思いますけど」

「だって……貴方何も言って来なかったじゃない」

私がそう言っていると、ローラはこちらを向き、まるで興味の無いテレビ番組でも見ているかのような表情で、私を見た。

無感情。

冷たい目。

即座に、そう感じ取った。

「私が何か言わないと、何もしないんですか？ 何かしたい事があったから、チカラを手に入れたんじゃないんですか？」

ローラの言っている事がもっとも過ぎて、自分が恥ずかしくなった。

確かに、その通りだろう。

私は、何かがしたくて、チカラを手に入れた。

「チ……チカラは、ローラが勧めたんじゃない」

それでも私は、言い訳を続ける。

自分が間違っていると、認めたくないようだ。

「そんな理由で二年三ヶ月の余生を手放したんですか？ 私があと一週間で死ねって、なつめちゃんに言いましたっけ？」

その、通り。

ローラは、私に選択肢を与えただけ。

ローラは、間違っていない。

つまり、ローラの言う事が、全てにおいて正しい。

やりたい事を、やらなくては。

しかし「やりたい事」の件は、ローラが言い出した事。

つまりは、もう既に、ローラの手駒。

畜生。畜生。

ローラが正しいから、ローラに対して、腹が立つ。

私以上に優秀な、ローラが気に食わない。

「やりたい事があるんなら、今す……ぐ……」

今まで必死に押さえ込んでいた黒いモヤモヤが、ついに私の外へと飛び出した。

つまり私は、キレた。

「うるさいな。解ってるわよ」

私はローラの喉をつぶした。というより、首の骨を折った。

その際にゴキヤという音が聞こえてきたが、その音が乾いて私の耳に届く。

「ゲフツ……ゴボツ」

綺麗だったローラの顔が、一瞬のうちに苦痛の表情に豹変する様を見るのは、快感にも似た感覚だった。

口から泡になった血が、ブクブクとあふれ出ている。大きな目玉をギョロギョロさせて、私の姿を探しているように見えた。

どうやら息が出来なくて苦しいらしい。金魚のように口をパクパクとさせてる。

その姿が、なんだか笑いを誘う。

「ローラ。今は私のほうが強い」

優越感を、そのままクチに出した。

なんて快感なのだろう。

全身を、歓喜が駆け巡る。

何度も何度も、絶頂に達してるかのよう。

「が……う……なつ……」

ローラの声帯は、既に修復してきているらしい。声が出せる状態にまで回復しているようだ。

私はその場に立ち上がり、今度はローラの目を見る。

それと同時に、ローラの目はブジュという音を立てて、破裂した。

「あつ……！ ああ！」

「ねえ、知ってた？」

私はローラの耳元へと、クチを近づけて、小声で話した。

「私、貴方の事嫌いだったの」

やりたい事のひとつめを終えて、私は小汚い部屋をゆっくりと出て行った。

後ろからは、ローラの声にならない叫び声が聞こえている。

後編

玄関を開けながら、小さな声で「ただいま」と、誰にも聞こえないように声を漏らした。

しかし、それと同時にドタドタという音を立てながら、妹である真美が階段を急いで駆け下りてくる。

「おっ……お姉ちゃん、今日学校行ってないでしょ？」

必死な表情を見せながら、妹は私にそう言った。

私にしてみれば、そんな事はどうだって良い。

「お姉ちゃん私服だし……何？ 何かあったの？ お母さんカンカシだよ？」

「別に。何でもない」

私はそれだけを言っただけで靴を脱ぎ、家の中へと入って行った。

妹は素っ気無くされていると言っただけに「何かあったんでしょ？」

変だよお姉ちゃん」と言いながら、私の腕を掴む。

今更、私が変になっている事に気がつくなんて、遅すぎる。

遅すぎて、思わず含み笑いが出てしまう。

もう少し早く気づいていれば、私は契約なんて、しなかっただろうに。

「ねえ……男の人なの……？ その服も男の人の家にあったヤツとか……」

「うるさいな。何でもないって言ってるでしょ」

「あ、お姉ちゃんリビングは……お母さん怒って待ってるから……」
「うるさい」

私はいつもの通り、リビングのドアを開く。

そこには、ソファに座りながらテレビを見ている、母親の後姿があった。

いつもの通りに、私は小さく「ただいま」とだけ発し、台所へと向かって手を洗う。

「なつめ、ちょっとこっちにいらっしやい」

「嫌」

私は覇気無く、ほぼノータイムでそうつぶやいた。

小さな声だったと思うのだが、どうやら私の声は届いていたようだ。私の背後から「なつめっ！」という大きな声が聞こえてきた。

母親は、本当に分かりやすい人間だ。己の感情にはどこまでも従順。

私がこれまで、どれほど自分を殺して生きてきたかなんて、この女には理解できないんだろう。

一切の反抗をせず、ただひたすらに従ってきたと言うのに、妹よりも不遇にされてきた、私の事なんて、この女には理解出来る訳が無い。

「なつめ！ 今日どうして学校に」

「うるさい」

私は奴の右足を見つめ、アキレス腱が切れる所を想像する。

すると、そのイメージの通りに、母親はその場へとうずくまった。ブチッという、音と共に。

「いっ……！ ああ……！」

その様子をドアの影から見ていた妹が「お母さん！？」という声を上げて近寄ってきた。

「あああっ！ あああっ！」

うるさく、汚い声が私の耳に届いてくる。

とてもとても、耳障りだ。

私のお腹の辺りで、黒いモヤモヤがグルグルと回っているのを感じた。

グルグルと回って、黒いモヤモヤは、感情と変わって行く。

それは、明らかに負の感情。

作り出された感情は、全身へと駆け巡り、私を支配する。

ローラの首を折った時も。ローラの目を潰した時も。同じ感情が私を支配していた。

「あは」

私は、更に念じた。

歯よ、抜ける、と。

喋れなくなるように、抜けてしまえ、と。

「ひぎいいっ？ いいいいっ！」

「いやあ！ 母さん！ お母さん！」

母親の口から、白い固形物が、赤みを帯びて、ボロボロと抜けていく。

面白そうだから、八重歯だけは残しておこう。

「おっ……お姉ちゃん！ お母さんがっ！ お母さんが……あ」
妹が私の顔を見て言葉を詰まらせた。

流していた涙を一瞬のうちに止め、顔色を一気に青ざめさせる。

「いやっ……お姉ちゃん……何で笑顔なの……」

「何よ」

「なんでえっ……？ いやああっ！ いやっ！ 悪魔あっ！」

本物の悪魔を見た事も無いくせに、私を悪魔と呼ぶなんて、幸せな奴だろう。

本物の恐怖を、知らないのだろうな。

教えてあげなければ、いけない。

「悪魔？ 私が？」

「悪魔あっ！ いやあ来ないで！」

私は笑顔のまま、妹へと近寄った。

それに連動するかのように、妹はあとずさる。

妹へと近寄る途中に「うーうー」という、汚いうめき声を上げている母親が居たので、思い切り踏んづけた。

それと同時に「うぐっ」という、更に汚い声を漏らす。

「私は別に、何もしてないじゃない。母さんに少しでも手を触れた？」

「いやっ……いやああっ！ カズくんっ！ カズくんっ！」

カズくん。山本和義。

それは妹の彼氏の名前。

高校二年生の、サッカーをしている、長身の、格好良い男子。妹は、容姿が良いという訳では無い。成績だって、中の下で、私の遙か下。確かに明るい性格をしているが、決して社交的という訳でも無いと思う。

それなのにコイツは、中学生の分際で彼氏が居る。週に一度は彼氏を家へと招きいれ、母親と妹とで談話をしていた。その間私は、三人の笑い声を聞きながら、自分の部屋で勉強をしているフリをしていた。

何故、コイツはこんなに恵まれているのだろうか。

何故、私はこんなに恵まれていないのだろうか。

何故。

そう思うと、許せなくなつた。

「アンタ、私を見て何を感じてた？」

「やだあつ！ 来ないで！ 嫌だよあつ！」

「聞いているの。何を感じてたの？」

「怖いよあつ！ カズくつ……うつ……かはつ……」

妹は恐怖を、表情と声で表していた。

確かに、映画やドラマでは、ヒロインが恐怖に怯えた時、引きつった表情を作り、ヒステリックな声を発する。

しかしそれは、本物の恐怖ではない事を、私は知っていた。

本当に恐ろしい時は、声を発さない。

息をする時に漏れる「ひっ」という音と、小便と、ただただ震える体。

それだけしか、無くなってしまう。

少し前に、私自身が体験した事だから、それが真実だと知っている。

妹は、私という外観を見ているから、心のどこかで安心しているに違いない。

だから私は、妹の気管を火傷させた。

「あつ……あつ……くる……し……」

妹は両手で喉をおさえ、ガクツと膝をついた。
目からは大量の涙を流す。

「おね……ちゃん……くるしい……くる……」

妹が息をするたび「ひゅう」という音が私の耳に届く。

「ねえ、私を見て、何を感じてたの？」

私は妹の前でしゃがみこみ、頭にポンと手を置いた。

「教えてくれないかな」

「はっ……あ……私……お姉ちゃんの事……き」

「え？ 何？」

「好き……だから……けい……さつにも……言わない……から」

私は母親へと視線を移し、イメージの中で心臓を鷲掴みにする。
すると母親は、一瞬だけ汚い叫び声を上げて、足と手をビクンビクンと跳ね上がらせた。

妹は母親のその姿を見て、小さく「あ……」と声を漏らす。

震える左手を前に伸ばし、目を大きく見開き、大量に涙を流した。

「好き？ 何言ってるの」

「はっ……はっ……！ ほっ……ホントにい！ ホント……だから

っ！ やめてっ……！」

「やめるって、何を？」

私は、より強く心臓を掴む。

すると母親は、激しく痙攣するのをやめ、小さく、小刻みに体を震わせた。

声は、もう聞こえてこない。

「かつ……母さん……っ！ あああつ……」

「嘘なんでしょ？」

「はっ……はっ……」

妹は、私の目を見た。

私も、妹の目を見た。

「私の事が好きなんて、嘘なんでしょ？」

親も、妹も、父親も。

クラスの皆も、学校の先生も。

私に興味なんか無い。

死を間近に感じるようになったここ最近、その事を急激に理解してしまった。

つまり私は、これから二年三ヶ月、生きたとしても、死の直前まで、誰からも興味を持たれる事なんて、無かったのだろう。

いや、もしかしたら、たとえ死んだとしても、興味を持たれないかも知れない。

だって、ローラに見せられていた誰かの死に対して、私自身が、親身になれていなかったから。

人は、誰かの死に対してすら、無関心だって事は、自分自身で、証明済みだ。

それでも、生きていたいって。

そう願っていたような気がする。

何故だろう。

いつか誰かに興味を持たれて、理解される事を望んでいたのだろうか。

……きっと、そうなんだろう。

私は、寂しかったんだ。

嘘でもいいから、興味を持って欲しかった。構って欲しかった。

ローラは、私に言った。

「本当に詰まらない人間」と。

詰まらない人間に、興味を持つ人間なんて、居るハズが無い。だけど、どんなに努力しても、私は、詰まらない人間。

どうすればいいのか、私には分からない。

だから、恵まれているこの子を妬んでいる。

私がついていないものを持っている、妹が。

どうやら私は、嫌いらしい。

「まあ、いいや」

私はため息交じりに落胆の表情を浮かべながら、妹の頭から手をとけた。

「え……」

「死んじゃえ」

私のその声と同時に妹の瞳は光を失い、ゴトツという音を立ててフローリングに頭を落とした。

私は携帯電話を持った事が無い。

特にこれと言って必要が無かったから。

だけど、何故、妹には与えて私には与えなかったのだらうと、いつも疑問に思っていた。

いや、疑問というより、やはりこれも嫉妬なのだろう。

愛されている妹に、腹を立てていた。

「……さって」

私は妹のジーンズのポケットから携帯電話を取り出した。使った事が無いので操作に戸惑う。

「カズ……カズくん……と」

私は独り言をつぶやきながらメール送信画面を開く。

「あ、あつた」

カズくんという名前の後に、ハートマークがつけられている。なんて分かりやすい愛情表現だろうか。

「さあて、どうやっておびき出そうかな」

私の独り言は続いた。

家のチャイムが鳴り、私はいそいそと玄関へと向かう。

扉を開いたら、そこには妹の彼氏であるカズくんが立っていた。てつきり妹が出てくるものだと思っていたらしく、少し驚いているようだ。

「あ、お姉さんですよ、真美の」

「ええ。あ、真美に用事？」

「まあ、はい。急に会いたってメールが来まして」
私はクスツと笑った。

「確か貴方のほうが年上よね？ どうして敬語なの？」

「あ、はい。そうでした……」

私は再び笑う。

「だから、敬語じゃなくていいってば。今ちよつと真美は家に居ないんだけど」

私がそう言つと、カズくんは驚いたように「え？」という声を漏らした。

それはそうだろう。呼び出した当人が居ないなんて、そんな馬鹿な話、あつてたまるか。

「え……参ったな、部活抜け出して来たのに」

「良かったら、上がって待ってて？ すぐに戻らと思うから」

私は玄関のドアを大きく開け、彼を招き入れた。

あはは、地獄へようこそ。と、私は心の中で笑う。

「あ、そう……だね。待たせてもらうよ」

彼は少し戸惑いながらもドアをくぐり、ゆつくりと靴を脱いでいる。

「リビング散らかってるから、真美の部屋に居てくれる？」

これが終わったら、明日は学校だ。

「え？ あ、はい」

その次は国会議事堂か？

「また敬語っ。私って年上に見える？」

その次はホワイトハウスだろうか。

「え？ なんて言うか……」

とにかく、寂しい思いのまま、死にたくは無い。

「なんだか、落ち着いてますよね、雰囲気か」

知らしめてやりたい。

この世界に、私の存在を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6433j/>

なつめ

2011年7月12日03時34分発行